

アルコールと読書

大型連休といつても別に心動く楽しみがあるわけ

ではない。日の暮れる頃になってリビングルームの卓の右手にハイボールをおき、左手に溜め込んだ小ぶりの本を何冊かもってきて活字を追いかけるというのがせめてもの慰楽である。二冊の本に強い印象が残った。一つは石平さんの『三大中国病』(PHP新書)、もう一つが大平裕さんの『倭の五王』の謎を解く』(PHPエディターズ・グループ)である。

中国史は古来、皇帝を頂点とする国家が「律令」と呼ばれる法体系にもとづいて土地と人民を一元的に支配する極端に中央集権的体制を築き、この体制を倒して次の中央集権的国家がまた築かれるという転変の歴史を繰り返してきた。石平さんらしいハイテンションの筆致に促されハイボールの数がふえていく。日本も国家形成の時代には中央集権的体制を求めて律令制を導入したことがあったが、日本の国柄との相性がよくなかったらしい。唐が滅亡する頃から形骸化し、その後の日本は各地の荘園に権力基盤をもつ武家集団が力を伸ばして地方分権的

渡辺利夫

(公益財団法人オイスカ会長)

一九三九年、山梨県生まれ。七〇年、慶應義塾大学大学院経済学研究科博士課程修了。経済学博士。筑波大学・東京工業大学教授、拓殖大学学長、総長、学事顧問などを歴任(二〇一〇年十二月、退任。二〇一七年六月より現職)。

なシステムの形成へと向かったという。

しかし武家がいかに強い権力を握っても、その權威の源泉はつねに天皇にあった。天孫降臨に始まり血統的なつながりをもって絶えることなくつづいてきた權威は天皇のみのものであった。むしろ武家は天皇の權威のお墨付きを得て、これをみずからの権力の正統性の証としたのである。さればこそ、日本史においては皇統譜が決定的な重要性をもつ。大平さんが老境に入ってなお衰えぬエネルギーをこのテーマに注ぎこんでいる理由もそこにある。

倭の五王というのは、中国宋朝の全期間の六十年にわたって遣使朝貢を重ねた五人の国王のことであるが、その系譜が日本の古代史学会では容易に特定化できていないという。皇統譜に不明な時期があることなど許されないというのが大平さんの心根である。宋書、記紀はもとより朝鮮古代史の文献や石碑にまでその痕跡を求めて倦むことなく実証を重ねる大平さんの真摯な記録を読んでいると、アルコールが深く躰の芯にまで届いていくように感じられる。